

同一情報の表現の異同

博士前期課程二年 蓮 見 陽 子

調査の目的 本研究は、同一の内容による複数の言語表現、文章表現を素材として、それぞれの表現の異同について分析し、個人的な文体の特性を明らかにすることを旨としたものである。つまり、比較に用いる文章の内容を同一のものに限定することにより、それぞれの作品の内容による差異の反映を抑え、作者の純粹な表現上の特性を導こうとしたものである。

調査の方法 分析には、日本の古典文学作品のなかで、最も多くの読者を持ち、多数の訳文が提供されている『源氏物語』の現代語訳の文章を用い、そのうち、第16帖「閑屋」を取り上げた。その21種類の訳文について、「文の数」と「文の長さ」を調べ、さらに、その中で、現代の一般的な読者を対象としていと考えられる6人（谷崎潤一郎、与謝野晶子、舟橋聖一、円地文子、田辺聖子、窪田空穂）による9つの訳文について、「品詞の構成比」、「助詞の比率」、「使用頻度の高い助詞の比率」、「使用語彙の特徴」を計量的に分析することにした。

調査の結果 21種類の訳文のうち、「源氏物語」の研究者による注釈的、ないし、直訳的な立場からの訳文は、「文の数」において、いずれも、平均的な数値を示し、創作的、ないし、文学的な立場からの訳文の場合には、個体差が大きい。

《文の長さ》についてみると、平均して一文が最も長いのは、谷崎、短いのは、田辺である。谷崎は、接続助詞を多く用い、時間的な推移を追った流れるような文章を書いている。これに対し、田辺は、谷崎が1つの文にしている部分を、6つの文に分け、会話をを用い、人物関係を明確にした文章で訳している。

《品詞の構成比》や《助詞の比率》には、訳者による著しい差異を指摘することができる。舟橋は独特な品詞構成をもっており、谷崎は助詞の構成に特徴がみられるが、円地の文法的な特徴は平均的で、いずれの使用にもほとんど偏りをみせない。

《使用語彙の特徴》においては、高頻度語彙にはほとんど差異はみられず、やはり、原文による規制を受けていることがわかる。その一方で、6人の訳者のうち、5人が「気持・気」などを用いて訳す部分に、谷崎は、もっぱら「心地」を用いる、などのように、個々の訳者によって、用語に個人差があり、個性的な文章が構成されていることがわかる。

これらの特徴を因子分析にかけると、与謝野の文章には、漢文的な影響が残存しているのに対し、田辺の文章は文が短くなっている、などの時代的な流れを追った文体的な特徴が導かれる。そして、谷崎は訳文という規制を受けながらも、やはり、和文系で名詞の少ない長い文を構成することがわかる。

今後の課題 このような同一情報の表現にみられる質的な異同について分析することで、文章表現に内包されている安定性を明らかにしていくことを今後の課題としたい。